２０１６．７．２１大草

読書メモ

１．金岡秀友　「釈尊とその生涯」（大学教育社）

２．原田伸夫　「日本仏教の社会倫理」（岩波書店）

３．島園進　「源信　往生要集」（平凡社）

４．井上順孝　「宗教社会学のすすめ」（丸善）

５．阿満利麿　「仏教と日本人」（筑摩書房）

６．岩井宏實　「日本の神々と仏」（青春出版社）

７．山折哲雄　「ブッダの教え」（集英社）

８．中村元　「法華経」解説（小学館）

９．大隈和雄　「日本の文化をよみなおす」（吉川弘文館）

★「往生要集」より。

極楽浄土とは、どんなところ？大胆に概観すると以下のような素晴らしい場所のようである（番号は、小生が便宜的につけたもの）。

１．美を極め、妙を尽くしているところ

・全ての色が清浄で美しい

・聞く声がことごとく悟りの声

・瑠璃を地とし、黄金の縄で道の境をつけ、平坦でひろびろしている

・はればれとした輝きがあり、微妙に麗しく清らか

・なんとも言えない美しい様々な衣を地面一杯に敷きつめ人も天人もこれを踏んで行く

２．宮殿について

・七つの宝で作った宮殿や楼閣が五百億ある

・宝で飾られた寝床や座には美しい衣を敷いてある。七重の欄楯（てすり）や百億の華の幢（はた）には珠の飾りが垂れ宝玉づくりの幡（のぼり）や蓋（かさ）がかかっている。

・宮殿のうちや楼閣のうえには、天人がいつも伎楽をかなで如来をたたえて歌をうたっている

（以下省略　３．池、４．階段、５．仏の教え、６．喜び、７．逍遥、８．河、９．樹々のすがた、　１０．大空のすがた）

１１．浄土

美しい香や塗香・抹香などの多くの香りが浄土に満ちており、それを嗅ぐと煩悩もおこらない。地上より大空まで、宮殿の華も樹も計り知れない。食べたいときは七つの宝でできた机があらわれ、七つの宝でつくられた食器においしい食べ物が一杯入っている。その美味しさはこの世と違い、また天上の味とも違う。香りのよさはたとえようがなく味かげんは思いのままである。

色を見、香りをかいで、身も心も清浄になり、食べ終わると同時に力がみなぎる。食事を終えると消えてなくなり、時がくるとまたあらわれる。浄土に生まれた人は衣服がほしいと思うと思い通りにすぐ得られる。ここでは、光があまねくいきわたり、日や月や燈火がいらないし、冷たさと暖かさもほどよく調和し、春夏秋冬の差もない。

（略）そよ風にあたると、心地よい喜びをいだきこころの全てのはたらきが尽きてしまった三昧の境地を得たようになる。

（略）数限りない仏の国のなかで、極楽世界に備わっている功徳がもっとも勝れる。二百十億の仏の浄土の厳かに清浄な勝れる点がみなこのなかに収められているからである。極めて重い罪業でも除かれ、生命の終わったあとはかならずこの国に生まれる。

このような極楽浄土に行くための方法が「往生要集」に書かれている。

★「日本の文化をよみなおす」より抜粋。

・この世を厭離して浄土を欣求することを教える浄土教は、苦悩に満ちた穢土としての現世から、来世では理想の浄土へと生まれかわることを願うように勧め、往生のために有効な方法を様々に教えた。来世で極楽に生まれようとすれば、現世における自分のありかたがその因縁になることを考えねばならないし、現世において来世には極楽にうまれることができるような功徳を積もうとすれば、そうした善因縁を積むことができるかどうかは、現世の自分のありかたに関わっており、それは当然現世の自分をあらしめている前世の因縁にも関わってくることになるであろう。

現世で功徳を積むと浄土に行くことができるという信仰があるが、現代人はどうか。

以上